

癸卯經辨疑論

上

17

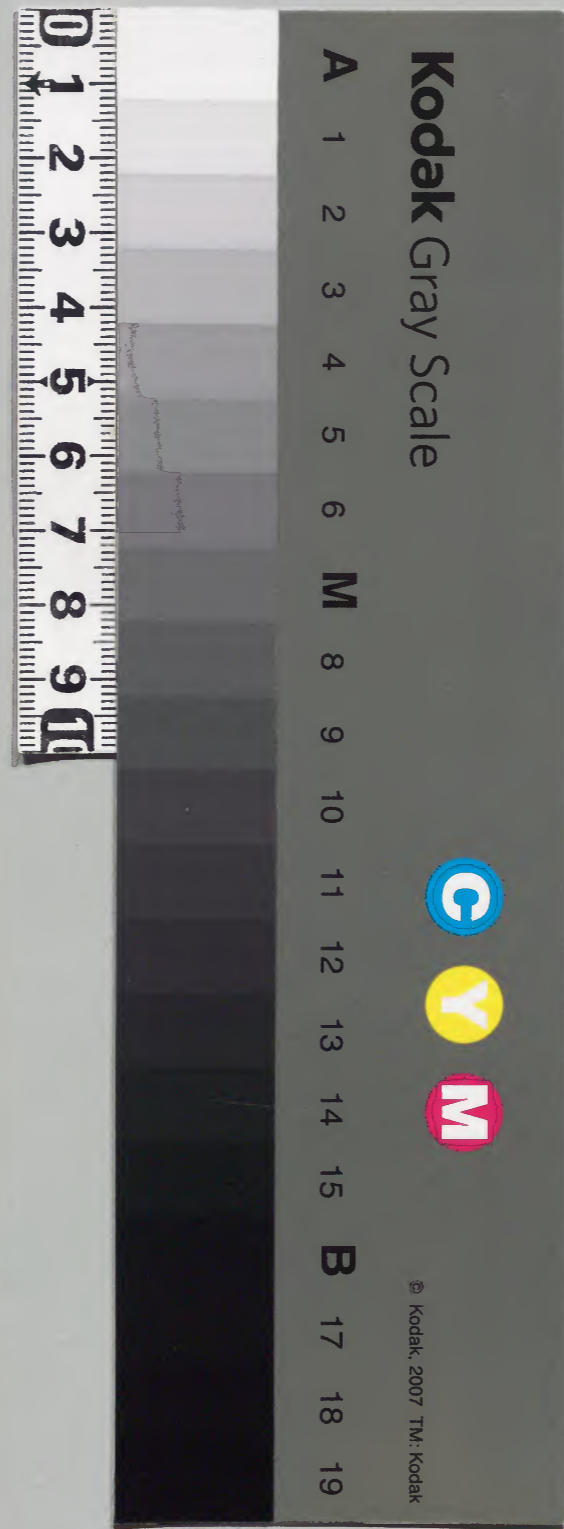
內閣文庫	
番號	和 27889
冊數	3 (1)
函號	154 348

348

內閣文庫			
五	二		和
四	七		
函	八		書
一	八		
七	三	九	
架	冊	號	類

348

154-348



△鷹經辨疑論上

明治十六年購求

新島書藏

又鷹ハヨク瑤クハシ光クハシの精氣クハシなり

衆身に異なりクハシ五常クハシにクハシたり

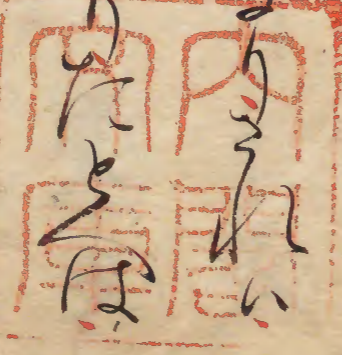
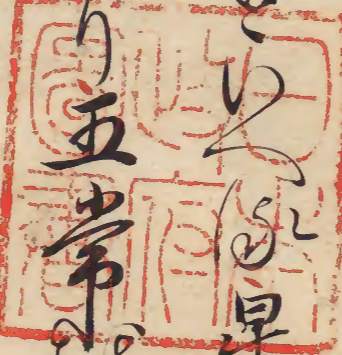
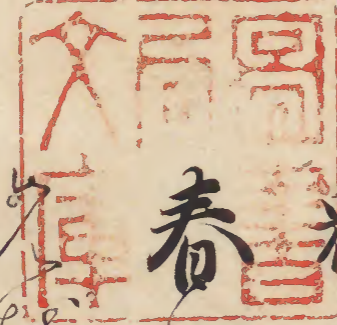
春鳩クハシ為クハシは仁也秋クハシ行クハシ戮クハシ義也食クハシとクハシに

不クハシ忘クハシ敬クハシなりクハシ誅クハシとクハシにクハシ強クハシはクハシなり

勇也クハシ能クハシをクハシ持クハシはクハシなりクハシ知クハシるクハシ利クハシ羞クハシ也

鷹クハシとクハシてクハシらクハシるクハシはクハシなりクハシ天クハシ竺クハシ江クハシ南クハシ國クハシ也

雷山クハシのクハシふクハシりクハシとクハシてクハシ殺クハシしクハシ初クハシめクハシはクハシなり



六月三日の申此めに大善道野と云ふは
ならに白文の意此野の務成獲より其
相形は白眼ハ明星のこく頭いたいりて
秋月は似たり此野はくれこくして鷲の山
といはるるたるに大異有らんやうて
海中に二石のうかたはれりて一足を
そんじりてみまはくれけのさげをりて
たらかごとくおの南山は流たらに似たり

是鷲乃王より長端ら者紅梅の講たうたぬき
紅卷上の糸と鈴付て田かりよあつるなり又
摩訶陀困めて聖戒せいけい大聖世も衆生の心教乱
不同るれいゆじよ熟して當に得さるる
為るりは道ともあるなり人を造次めはれ
吾考や是生滅法煩惱菩提なり生死
即涅槃やと觀せし標月の指邪正一如の
時はありて一截さつ辟へき峯かみに立し鷲じゆ嶺りやう

すゆるりこし母公弼余儀あり共其
撰蔵政頼勅と兼波津より行向て有る御
侍しりりひ某代しの聖王早は成り
活ひて禁野所野の御狩守り多芥川
道遠たゆら事ありしは成しと尊政撥
之術亡しと尖湯の祝舞多也少謂或
同成しと得矢成しりり掌飼の奥旨成
述るし号尊政辨疑端

或同尊良相成先せん也其術成せん也
答云良相成先せん也其術成せん也
術成先とせん也成あり故は尊政あり
仲尼の徳とありいよく言信の失之宰弔
以顔度性失子羽之と云はれたる
しんごのしんごありし事又しんご
志すも心徳のしんご識量のかしんご
しんごす只掌飼熟年志す心術成

誠好也汝わつは海ぢやれ

○或向舊汝相と汝法けり海に成 善云
先有るを神大うり汝良とすんしんをり
大則威蹙汝ひて身汝其のさ小則ハ多よ
そのありしうり 經云神ハ魁岸うり事汝
得と欲せんうりしり大うり汝良とすんしんをり
○或向新也と入道と胸腹を羽翼なる
うき新事軒のふととと新水のありし

とや 善云汝文を鷹の經の語より胸腹を
ひらきりいろ汝新す胸ひらき事なる
後みしとのさのぬしと云ハ漢云よ夫
の意車を斬たふしとてうきをたなり
多よは^{急げ}鳳凰の胸のとくうり
羽毛いりき骨をぬしとてうきをたなり

○或向新舊上にしんしんうりと良といふ人あり
亦よししん汝をしらん人ありとありとあり

すむ 善く者よ上肉は其の中はくは也
白氏文集小楽夫いづく鷹の性は割る家
事 飢飽の対はる飢ぬる対をちくは是
飽こさくははとじくと云又曰魏文帝陳登
に於て云吾呂布は畜事 鷹はくふこと
飢則用らむは飽則揚去とあり長飢は
飽正はくうらいたり又文選は云飢る鷹
を吻^クは礪^シを鳴^スは離^ルと嚙^ムあり

○或曰良相と委別といはるるもさや善
鷹のむとくは三段善とハ頭をあげてのこ
れをうはし一掃うるなまなりこらと
弱めらすはけり此相形を他の良相はあま
夢^ミ菁^シ鷹^トといふ下は毛羽共にみく
切はがたなりとくはは鳥ちく記を則
こりそく逐事なるんといふり
鳥^トの善とい解^リと野^ノ共よみく

いづく用てみゆれば良きす頸のつゆとくを
長短いとも骨の躰は相称上頸をさるゝと
多の卵のおとくるらん亦頸長すを
たゆまぬ樹は透に音ありみかゝる
真の膏よりいづくはふこもまり府を剛
厚二の翼節いづくもたもつるは
良とす骨を大長とらん亦骨は
版を竈に照の中へ骨のおとくるらん

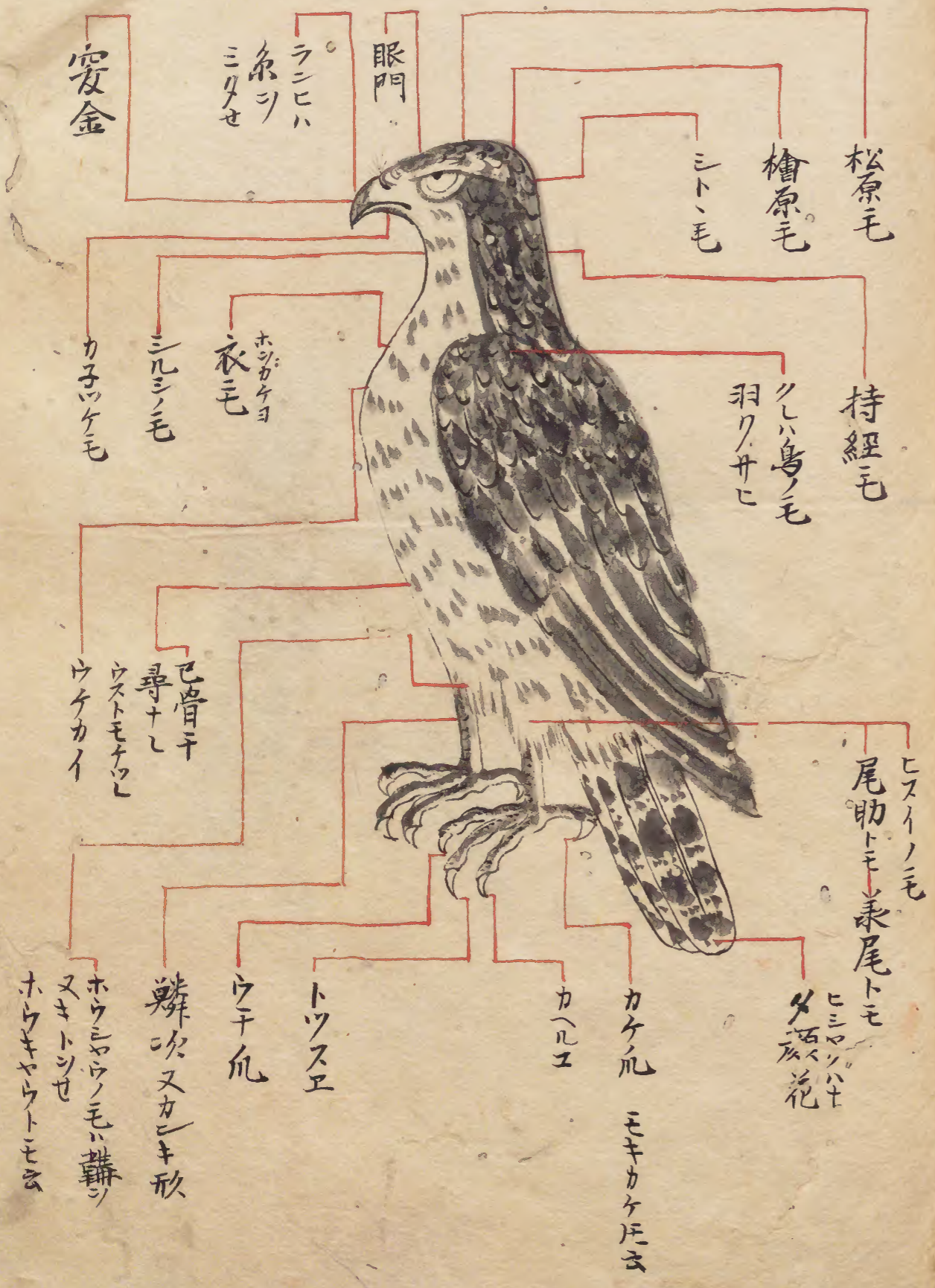
と良とす腹方を長と相なり後大骨を
短の飢やともはつとせよ短命なり
背をみそら乾は良とい翼羽長と
すくよ雉の羽の側うらふとく丸のとに玉
たるはよりとい腹羽覆羽重錢羽を
うしくとて覆つた事ほめ着たる
羽をあらはせよらん羽幹を甲に
亦方にきて羽をいづくも良とす

凌風の如きたりくそて翼に着たりか
ふとくう家魚一尾ハ中末とりた婦とあり
美尾之柔みく細く白綿のおとく尾
魁ふふとくう一尾の班文を^{えん}箭像所
像る^いは^はは^は古人は^いは^は古^いは^は開^いは^はこ^いり
箭像尾^や出^いと^いま^いま^い今^いま^いま^いあり
箭^やの^い欠^いを^い大^いが^いら^いと^い長^いと^いは^いく^い寸^い
やうやく尾^いは^いあ^いそ^いう^いい^い勅^いて^い功^いと^いた^い道^いを^いく

はくや^い是^い箭^いの^い欠^いは^いら^いさ^い也^い股^いは^い長^いく^いて^いお^いさ^い
お^いり^い甲^いの^いと^いく^いは^いは^いり^いて^いこ^いり^いと^いま^いま^いは^い
肉^いと^いく^いあ^いあ^いり^いく^い肉^いと^い平^いら^いら^いる^い海^い
蕨^い蕨^い骨^いと^い大^い小^い肘^いの^い毛^いと^い後^いと^いう^いひ^いと^いし^い
睡^いハ^い禮^いみ^いく^い侍^いよ^いと^いま^いい^いひ^いら^いく^い箭^いよ^い
み^いま^いは^い細^いと^いう^いと^い肌^い皮^い鱗^い次^いり^いら^いみ^いと^いく^い
ある^い魚^い一^い足^いと^い孫^い持^いたり^い高^い賤^いよ^いと^い足^いと^いく^い
双^い結^いの^いお^いと^いと^いと^い枯^い木^いは^いは^い二^いつ^いら^いら^いた^いら^いか

あつり。跛ハ卒らみして枯下。舌肉ありく
あつて色の比類のことくうゑる腫れを
指ハ流大めく間のらまて十字のことく如
魚。右指ハ前。して打らるるよ元ハり
ふく未細くことく下卒るる。右鼻相
鷹^鷹の從り今案にはよる後むは
り。とす。但頭眼鷹^鷹経り不遠餘此
相形^{相形}はる云^云通^通らるんはと也。

○或同^{或同}あつて鷹^鷹さいめらるるや。昔^昔さあつて
鷹^鷹は醜^醜鷹^鷹と云らる。其相^{其相}を頭^頭ちのく
とてとらり眼^眼ハりいそくそてあらりしれ眼の後
海^海元ありて項^項よそく鼻^鼻のある^れ穴^穴を^て鳩
鷹^鷹さあつて次^次此^此骨^骨を^らいそく^て仰^仰項^項
細くそて^{たか}撓^撓或^或ハまう^ま家^家釣^釣のあつて
一の^一翼^翼節^節骨^骨を^らいそく^て翼^翼羽^羽を^らいそく
海^海まらり^り翼^翼を^ら曲^曲らる^る鈍^鈍羽^羽を^らいそく^てあ



今案に掌飼のふりうふにふりう
 羅鷹を病身事しけし死ひりく
 かりうをけし羅鷹をうりぬ

覆羽



七浪
廿九毛
重錢羽
四毛ト毛

ウチ丸

烏カラミ

ツイワ

カケツメ

カケ尻

カレユ

取手

鉗ハミ

羽幹
ア羽

愁毛



凌風

ツ羽

裳毛

風キリ

忘羽

十之羽

七羽

腋羽

荻藜骨

或同昔天子此御狩之こと行列の治分ありや
善云 仁徳天皇 鶴野御幸の代に宇
芥川可と行幸其行列左より往と

△行幸次第狩子或先小立大御代次より

狩子 大御 右大宰
丸白杖

隨身也 鶺鴒杖
童初着餅袋

右 近衛次將列
近衛次將列

狩子 大御 道まて
丸白杖

鶺鴒杖
童初着餅袋

危 近衛次將列
近衛次將列

御輿

御輿の後中一行を御殿上人供車之

童初の家来大口に餅袋と志也随力之

錦の帽子或折烏帽子上に着とより氷下

小下流の袴鳥頭乃大刀或帯して猪皮或

虎鞘と糸うりし餅袋或着何の色も

くろく 講之喜及也條或ハ藤方

段也殿上人冠の纓或もも喜と狩衣に

或もて或帯と野布刀或帯釣の皮此

鹿鞘込入鹿の皮は用ひるなり赤うろこ一乃餅
袋は若くは條かりかも藁方段鞆ハ青色又山入鹿
丸の鷹飼先よりなり右の鷹飼ハ将よ入く
後丸丸ハ鷹袋と名付さく源氏云ふことなり
うんこらうらうらハ鷹たかハたらいはらハは
う〜も敗ちのれ〜とりひ〜と海らけ
そ〜り〜と書うり

李郭王記云鷹飼親王公御地摺の布衣は

若くは及袴或は紫赤蘭比色綾の袴は用ひ
襦あは子ハ餅袋と名付さく今案に是ハ王御の
鷹飼の紫赤蘭より布将衣の摺の文ありは
若くは袴を用ひく或ハ紫赤蘭比の衣ハ
う〜ぬら〜と着ハ良〜とみえ〜と襦あは子ハ
下に重た綾縮のよりなり餅袋は甘魚〜
冠かむりハ名ハは海くあり又伊勢ハ名ハは〜
仁和寺門芥川より幸〜〜と家対今

たゞし六領名帽子は是の如し

今案五十一諸衛の鷹飼の装束先例聊不同

あり又鷹飼の鷹飼と其将衣不同

又云昌泰記の赤白椽赤白と云ハ赤久乃更なり

葵蔭あひのと苗あひのとめて摺た乳将衣なり其白椽

と云ハ其父の事なりけい前安やまと云ハ其と云ハ摺つる

将衣なり袴を締ひのころねと玉の帯巻

纒の冠鈕のと云ハ其はかに唐錦撰要

講の保記よみえたり諸衛の六衛のよけ

下の多なり源氏を御装束とみる重重の

冠のと云ハ其はあらため給ひき家の

見しり

西宮抄云天皇白椽の御衣はす延喜

の御時天皇右近の三場よりて直衣

とありため給ひる也又云昌泰元年所

御の御幸に赤白椽の唐綾の御衣と云

○御と野よ入る好は将衣と名をよ

今案に野よ入せ給ひ之後主と御服
の御並衣にいらたぬられ例とあり

赤と将衣はうきね一幸とあり

○或同武家の袴赤と名をいふうきねと名をよ

武家にたかして將軍家の御事と殿上と
准と一但何の位より御一と名をよ此
武士よりいふ例たりうきねと名をよ准と

官位ありらるきね又之官の武士を将衣と

と例なきれ記よりいふ又大洞の形ハ

中巻太の部よ名たり又社家に名をよ

洞の物名ハ洞一うきね水干に大目鑑ハ

赤根深の衣に名をよこの袴は帽子と名をよ

黒と腰よ名とありと名をよの袋と名をよ

雄と名一ト毛と名をよ

○或同袴ハ袴ハ何れと名をよ 善云先たうたぬき鞆ハ

ふいふつに入らぬおてひらびつゝの響の波若なら
人よじういて羽々せういあひ波暫みさためく
後方波ひらきて袋鞆波うと口傳るく
ぬひらさう波うしてじうぬ人のひさたまり
我力とせよ右のひさと叱よほら餅袋と
語れ力波ひらいて腰よけよ又下めし五
次よ鞭波語れて腰よさす下めしおく次よ
右乃も波ひく條のとき波人のひさり

あまらた家ら波かて申とひたのひさり
條波うりて足總のまゝとせめよ波の用足
とぶいぬく我にぎよ玉田一ぬなむとく
ひらふて條波めらわわつて教波ひく
たるまか力らりの羽るゝ尾波うぬく
礼をうぬ波踏たひらきてま又神家な
餅袋しち條河まし先のおとくいつま
ま後よけとよ下め語れあまの

ふしむしむし人のたふぬりて人の我右れ
さしよあきく條と申記がよめて鞭はひて
前のふとく礼はるしで右の力はひらきて
まうりく傳はし

○或回酒礼いある我や 昔々先右のひは
はき餅袋の結やあつておと傳はし次よ
鞭はひりておはあのおとくうもしで鞭と
そりあきして酒と申傳の伝に方ははひ

て末はゆひはよとら下は別ぬ書の方
知とぬし右のひを我う右ひさくらよひよ
後かわらし別をくのけはなまはしるぬし

○或回格ははうくまはるはははうらむ 昔々
また申はははうあり 傳はのふしはうらむ

長き絆のぬののしはさうてた右のひら
格よ不及しと三たむのりありて書は放
てぬぬし 罷ははてあしはぬりぬりて

旋子後通のしり、高し格と集るありり
たのしびて格よ支右のしびて長絆の
しり格と下り投てぬのしびてた
悵の前よはるなりしり高し格と下り
格よのそとて花じうて五三ひさしり
ぬよころらゆるぬしりしびりし事
うしりしり格と集るしりしりしり

○或回鷹は格よりりしりしりしりしり

○昔云先ころん、格とぬるも神はまのしり
しりたよぬしりしりしりしりしり
格よを絆とさる右の中格はつて絆の行
頭は一纏しりたのしびて肺絆のしり
ぬさて肺にせの右のしりしりしりしり
て格は高しりしりしりしりしりしり
高しりしり格よしりしりしりしり

右鷹は紐の語也

○或は書はらるるはよむしはあはれありや
善云書は乃出さるるはあはれあり田よ入る書は
投さるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
書はらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
書はらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
書はらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
書はらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
書はらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
書はらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
書はらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり



とてはよなはたなとよやま書はらるるはあはれあり
本よ集るるはあはれあり書はらるるはあはれあり
みくはあはれあり書はらるるはあはれあり
まはらるるはあはれあり書はらるるはあはれあり
たよ還るるはあはれあり書はらるるはあはれあり
たよ還るるはあはれあり書はらるるはあはれあり
たよ還るるはあはれあり書はらるるはあはれあり
たよ還るるはあはれあり書はらるるはあはれあり
たよ還るるはあはれあり書はらるるはあはれあり
たよ還るるはあはれあり書はらるるはあはれあり

短ハ鷄雉と獲て先ず腰ふく
じて鷹トビの清みよはつて安座
たのひヒの鳥トビの翼の中は
くろく黒くて鳥トビの毛毛をよよよよと集ま
—めめのひひつて物の肉肉はらひはらひを
と写うつて海うみにしりり

今案よいのこ短短——但但数数は獲獲て捉とらえ
鳥の丸丸は扱扱て百口百口ふふ啄啄せよ比甫甫は毛をとらせ

小こ指さしは毛を毛息息はくはくせて又又放放魚魚も也
肥肥たり翼の翼は翼ううけけ肉肉ははたたままをを
てて魚魚——血血氣氣後後——肉肉ををららひひ
雌雌は獲てたののひひののひひははららせよ雄雄と
獲獲てたののひひののひひははららせよ下下はは鳥鳥の
皆皆小小鳥鳥の脳ははよよ

又又鴨鴨と獲獲てた翼翼裏裏の肉ははとと——鴨鴨は
ああららららくくとと血血ををららくく肉肉ををららくく又又丸丸は

○俄よ由白うらあよあまはる葉よ花ははら
なまよひよとせよ家がりり鳥はかき事にあきなり
又あきよあきりり俄ようらうらあき入る事な
けりや架よ一庭よとに節事よ家ら花
心ともあよ物白にじりひてあきと毛羽はをり
あきたうらひよはよあ架よ花うへ
只春よあは日花言一いあああ花はあき
花にさるせんともいあ一常は架よあき
玉餅はみと家事なれはひよひく餅は

かほよあきあきうへあきのま平貴は何あ
とつらひのこよ食ああきとよあてのいあ
んそいああまやうにせよとああ架奉あ
よあきよひらて架よ花よ一餅は持るあ
亦枯本り枝うへあああきうに餅はあ
まうらひり

○或向葉よ花ははるや言え経よ二十一の枝

忘哉^レ山^レ たり一日悲のなめ敷凶喪の家せとる

今案よの悲歎喪れ家に高^レ汝^レ致^レ行
向^レに^レい^レる^レす^レ古^レ獵^レ汝^レや^レそ^レ執^レ致^レ平^レ申^レす

二日格帳汝^レけ^レう^レ致^レ暫^レ不^レ較^レ系^レ也^レ格^レ架^レに^レ觸^レて
傷^レ害^レ汝^レる^レい^レ こころいかに

三日目痛癢血痢鷹と又鶴と同架ふはら^レく うらや

四日^レ喧^レ塵^レ燎^レ灼^レ戲^レ詭^レの^レ屋^レ汝^レり^レい^レん えんげん

五日鷹^レ汝^レ放^レ射^レも^レ前^レに^レも^レお^レ作^レ魚^レ うらや 韓^レ汝^レ放^レる^レ ころれ

六日哺^レ糲^レの^レた^レに^レも^レ汝^レは^レ汝^レ馬^レと^レす^レ毛^レ汝^レ吐^レる^レハ^レ早^レ肉^レと^レあ^レよ

七日^レ背^レ汝^レ枝^レよ^レ高^レ斗^レ進^レ止^レよ^レ海^レを^レあ^レら^レり^レち^レ枝^レ枝^レと

あ^レけ^レされ^レ背^レの^レ傷^レの^レ尾^レ脱^レて^レ醜^レや こころ

八日^レ高^レ汝^レと^レ多^レて^レ馬^レ汝^レけ^レり^レも^レら^レ事^レな^レれ^レハ

驚^レ懼^レも^レ家^レ事^レな^レれ こころ

九日^レけ^レり^レも^レた^レる^レ害^レを^レ禁^レ止^レ鹹^レ臭^レお^レ汝^レ忘 こころ

十日^レ行^レ賊^レた^レる^レ也^レ汝^レの^レじ^レ哺^レ糲^レの^レ射^レを^レ他^レに^レ汝^レ洗^レハ こころ

十一日^レ酒^レの^レ毒^レ執^レ汝^レ禁^レも^レ沈^レ醉^レけ^レ射^レを^レ高^レ汝^レと^レあ^レら^レる^レ こころ

今案に條く不可有不慎古く云欲心
齋餼といふ扱考のハ成婦とらり考成
あちくそむに齋に成は字音のそ我
とのるれいふのそいしむららすそ
りのふららに齋の事なる也——

○或向も成は成にびは首成左とむること
たよりありや善云る細る礼記の曲礼云齋と
執りの首成たよららるるを以ては得也

○或向齋ハ成成のハと成事ハ何れも善
成ハ成成のハと成事ハ何れも善
欲言ハ成成と云りハ成成に教年ハりて
みきたる齋成ハ成成に成成ハ成成
たら成成と云て成成——

今案ハ齋成ハ成成ハ成成ハ成成
成成と成成と成成とす獲鷹ハ成成
日ハ成成と成成ハ成成ハ成成

その白膏のぬまを熱く温め

○或膏に水と功事いん 善く治すに 師のま
んしとせられよと人用と

今安よ是と試は肥たる膏は肉を
けハ先口は熱くもかき膏乃ありけり
吹魚をやらむの別ハ湯は吹き板印架
よはちのちて朝日よじくよ油のよと
野心とうせると能くも腹膏よは場

○或膏に木炭はくし 又か何とを 善く

古人も万病一茶とやめたり 花まに常に木炭
はくし 油をく

今案よりのり 膏にまかす事

みれ鼻膏よりのりも 羽をよはく
鼻孔を潤沃よ 城に万病一茶の證よ
まよ古く云羅膏は回るとのいあり

夜危はくして 碎粒よ 鉄をく

萩の焼火ははら滞してしつとる

今案にありては火よじつとるまらる

○或向夏類乃高村か入のはらや 昔云經州

相迄くしうそ高取村入すとりり四月下旬五

月上旬と云り又四月八日十三日十九日長辰を

まらして得備めて北はの雄よ合てたつて

高屋敷や足込わとれついと云や五月五日の

高屋敷一二月の日はあひまらと云又ま高屋敷

か次は七月十五日の君供の著は高屋敷の生氣

の方七間の家の著とれてしつて成のる乃成

れ時よあとうり或卒都婆と云り次とるり

高屋敷の高屋敷とるしつとる南はの島に

放てれ烟や足込初高屋敷と云て亦十月り

高屋敷のい事とる高屋敷の毛りつとる

四月より入くや日とるしつて 羅高屋敷

あつたもかこもらるる日とるしつて

○或當代ノ奇書ありて也 言云唐書と云

甲斐國山中と云物れ泉なり首字法の室花
よ唐書に云しむやよむせれは野書なり
未ぬとほよの山中其泉に此書ありて信く
唐書と号ししりり又云韓卷之唐國
の書なり小條院と云い三條院の御子
諱ハ教明即位口と云寛弘八年十月五日
親王となり三品よ位と云寛仁元年八月九日

小條院と号と云政成ありて一後り藤澤
藤花山城皆は河内ノ奇書也又云人王六十
六代一條院壞仁園融太子即位七歳は河内
鳩屋か羽國よりか家平賀赤目鷄腹雞丸
此は名書あり鳩屋又其鳥伝と云書也は書
さし成書に云しと云て一書は紅文と
なりては八懐の家茶と云と云て
申すとしてはあよの書と投たり是より

とせしむるも又驚き多きを又紅文を
と紅文と云はけき計し退たり書なり
今の昔より海へす **末本集**云

のくともさむとあざいせぬ八幡宮にまはる
と僧正公朝と云ふたり又二條の坊政云

る—ふいふ—の鳥とあり

又云鶏腹と云は鶏と云ふてしまたる書也
神泉の池めて鯉とて—鯉丸と号と

又け沖付瀬丸とて瀬と云ふと家友
をりたり江別大津よりかたり秋め云

荒波の鶏の巢書れり—瀬ありとて

又野守れ流と云ふ—**雄略**天皇の沖付

春日野めて沖将—給ふとて山書み

たりけりた云羽ななりあはみく沖書み

みこり—ありはらうくありひのひは上にあに

山書ありとて新あにうてみえたり **本説**

磨り箸を筆と云ふは鬼の汗まのこぼれ
て食らふ方より必紙板てやく時鬼を若紙守ら
し擧て申すかたは紙もはらたふりくる利
是ハ筆と云ふ不申也

○或同蕙文と云ハ心と切たるもや 善云蕙草
のふとく尾文切たり



是ハ今世の世ふ草といふしつとれ草也

このつとれ草といふしつとれ草は
今世つとれ草といふしつとれ草と云
伊勢のつとれ草といふしつとれ草と云

○又万葉集よ蕙草は宗苑と云又鬼の志
草といふありしと説よ蕙草といふ一草ふとて

ニのふありともや 又毛詩よ忘憂草は用たり
○或同若像尾と云といふなり也 善云若

の秋に似たり故になり 善云若

菅文



又屋像尾

菅の紐めはたがふ

代し款人の屋形より

魚にありし物きこ

新拾遺えきりいよみ

御船尾の眉まゆ白の雪ゆきのつら

為家なりかのしるし

亦またの尾おしと云



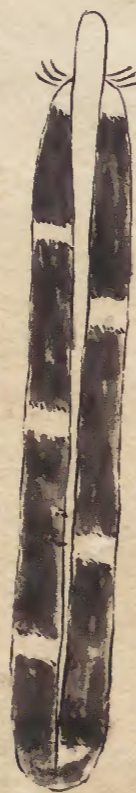
○或向町像尾むかまちのりょうおしのしるし

のしるし切らる文也



右今ハ文と用たり

菅の紐すげのひもよみ





○或向白鷹ゆぐん前事ゆぐ
 言云白鷹ゆぐ

凡前あり毛羽皆まろ手浅雪白こりり

背ハきりて鼻毛まろく七羽のまろ白こりり

重鍬の毛七浪小ゆぐ毛まろの白こりり

まろり又云白羽ゆぐまろりまろり

まろり又云白羽ゆぐまろりまろり

まろり又云白羽ゆぐまろりまろり

まろり又云白羽ゆぐまろりまろり

又云白羽ゆぐまろりまろり

信春あつたれ白鷹其相應鳥經にふる家の
うしすこも毛雪白こま魚一戒楚王の鵬
せら良鷹にふとらう次首頭ハ白綿波かつら
こし一羽毛ハ斑綾とらせたりた似たり首尾
三尺よ及りきくまそハ羽毛ありく近くそそハ
羽毛とらう一前よじうハ腋のこありて羽翼
みしとそれ新斬のさう一項平ありて
中さう月の光明皇小似たり眼うこわとまて

人小對せり乱鼻愁尾白絲れおと一目前み
たくのさひゆ一鼻のらなひらり方よ此南
く潤あり頭あはく振おく鳥ハ卵のおと一
この雪白とまら此南ハハとく一と全幹は
皆ゆるら魚一亦と白鷹とまら毛とまら
也一と文うりた云魚一
千載集
やう尾の白毛ハ鷹波のらとてまの第と将とて
と顯伸とらうり又云羽あ白くちてのりかくらな



